

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 174 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.12.29 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1383 部\*\*\*\*\*

---

□ 目 次 □-----

<今週の提言> 経済効率追求の破綻 大山 勝夫

<80 才からのメッセージ> 「墓碑銘」と「惜別」の追悼記事 原田 勉

<山崎農業研究所情報>

◇第 119 回定例研究会要旨——地域社会の動きと高校農業教育 (その 2)

2. 農業高校の担う役割について思う

——菅谷 明氏 [千葉県立茂原農業高校教諭]

<老兵の戯言> 鶏卵の話 藤原 昇

<編集後記> この年を忘れてなるものか

---

<今週の提言> 経済効率追求の破綻

---

年の瀬も押しせまり、それぞれの分野で今年の 10 大ニュースが取り沙汰される頃となった。国民生活の安心・安全に着目してみると、それにかかわる事件や事故が多かったことも今年の特徴だ。

春には JR 西日本で多くの犠牲者を出した尼崎の鉄道脱線事故があった。これなどは、他社との競争で少しでも利潤をあげようとした経営姿勢のあらわれといわれている。

身近なことに目を向ければ、BSE 牛肉輸入問題がある。かねてより筆者は「輸入再開は科学的判断を優先」と主張してきたが、現実には政府のシナリオどおりの結果となった。そもそも BSE 問題の発端は飼料効率を高めるための肉骨粉の利用であった。これで食の安全はまたしても裏切られることとなった。

そして、年末に人々を驚かせたのは、建築 設計の偽装問題である。国会に呼ばれた参考人の一人は、経済性の追求が何が悪いのかとひらきなおった。

ここにあげた事件や問題は、つまるところ、経済性追求の破綻のあらわれではないか。そして、人々の心はすさみ子供たちの命までも守れない世の中になってしまった。

そんななか、明治維新後のわが国近代化に貢献された渋沢栄一翁がフランスから帰国後提唱した「道德経済合一説」を読み返してみた。

翁曰く、経済・社会の進歩にともなって人々の道義心が低下するのが懸念される。それゆえに行動の規範として『論語』の精神に学ぶ必要があると。渋沢栄一が存命であったら、この1年わが国の経済活動をどのように見られたであろうか。

大山勝夫

山崎農研会員・日仏農学会会長

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<80才からのメッセージ> 「墓碑銘」と「惜別」の追悼記事

---

近藤康男先生が亡くなって死亡記事が新聞各紙に載ったのは当然であったが、有名人は、亡くなくても追悼記事の取材があるものだ。

「週刊新潮」の12月15日号に「墓碑銘」という1ページの欄があった。もう一つは、「朝日新聞」12月19日夕刊の「惜別」という追悼記事であった。

新聞に訃報が載った夜、まず、今まで縁もゆかりもなかった新潮社から私にメールが入った。「近藤康男先生の生前の思い出話をお聞かせいただけないでしょうか。」という。次の日の晩までに、電話でというので、お別れの会の配布資料（年譜・履歴・著作年表）を向こうが用意したバイク便で送り、電話で答えた。

朝日新聞の方は、7年前近藤先生の自宅にインタビューに訪れた記者だったので、これは最近6年の様子を知らせ、また、お別れの会にも参加してもらった。

有名人は最後まで名を残す、といわれることを実証したものだだった。

「週刊新潮」の「墓碑銘」の見出しは、「百歳を超えても一人で通勤 近藤康男さんの健康法」だった。

杉並の自宅から、理事長を務める練馬の農文協図書館まで、バスと電車に乗り継いで45分。

若ければどういふこともない道程でも、104歳になるまで一人で通ったとなれば奇跡に近いのではないか。という驚きである。

農業経済学者の業績は二の次にして、まず長寿の健康法に関心が向けられた。長男の淳さんにも取材して、「長寿の理由として真っ先に浮かぶのは、くよくよしなかったこと。マイペースで、周りを気にせず、あとを顧みずに好きなことをしていました。」と答えてもらっていた。

「健康には、かなり気をつけて、暴飲暴食せず、何をするにも節制型。夜は早く寝て、冷たいもの熱すぎるものは食べない。庭で野菜を作るのが好きでしたが、庭仕事で疲れると胃腸も疲れているだろうから、ご飯を八分目にしておこうとか。それに、午前中が勉強なら、午後は庭仕事というように、毎日体を動かしていました。しかも、庭仕事をして疲れた様子がない。中学5年間（長距離徒歩通学で）、1日も休まなかったそうで、基礎体力もしっかりしていたのでしょう。」

一昨年夏、白内障の手術の後、視力が戻らず、自由な歩行が困難になって図書館通勤もできなくなり、転んで足腰を痛めたが、筋肉トレーニングなどリハビリを続けた。生きる意志を失わなかったが、ついに今年の8月、肺炎を患って入院。あとひと月余りで107歳の誕生日という11月25日に息を引き取られた。

健康法のほかに近藤先生の業績としての評価は、“弱者の立場”ということである。

名古屋の第八高等学校から東大農業経済学科に進んだのは「米騒動や小作争議が続き、我ら何を為すべきかを悟った。」ことから一貫して弱者の立場に立ち、昭和18年には地主的土地所有の問題を指摘して東大教授の追放される。

終戦後、東大に復職し、農地改革に腕を揮い、農林省の統計局長になって農村民主化に寄与された。東大農学部で農政学を講じ、日本の農業統計の整備に

尽力された功績は大きい。文化勲章を受けなかったのも“弱者の立場”を貫いたからかもしれない。

「朝日新聞」の「惜別」は、著作 75 冊のうち、35 冊は 70 歳を過ぎてから書いた。最後の「三世紀を生きて」は 102 歳で出版し、ギネスブックの最年長著者並みだ。という評価をしている。見出しは「食糧自給で平和説く」というものだった。生前一貫して「世界中すべての国が食糧自給できれば戦争はなくなる。」というのが、持論だった。

また、お別れの会の弔辞で、東大で最後の弟子、今村奈良臣・東大名誉教授は、修士論文を出した後の近藤先生の言葉が忘れられない。「君たちも研究者の道を歩むことになる。今日から私の競争相手だ。できれば私を乗り越えて先に進んでほしい。」

遺影は、7 年前自宅にインタビューに伺ったとき、菜園で大根や春菊を作っていた野良姿だった。書斎での顔よりも健康的なこの姿が近藤先生らしいと見ていたからだろう。

近藤先生の遺したものは、農文協図書館に寄贈した蔵書など 1 万 2 千点の「近藤文庫」である。インターネットで目録が検索できる。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/071kondoubunko1.html>

私は、近藤先生の秘書を 15 年も続けていたおかげで先生の死後の取材も受け、80 歳で思い出を語る記事が新聞・雑誌に載ることになった。晩年まで尊敬できる恩師におつかえできた幸をしみじみ感じている。

いずれ、「最晩年の近藤先生の生き方」をまとめておきたいと思っている。

(2005 年 12 月 農文協図書館監事)

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

[tom@nazuna.com](mailto:tom@nazuna.com)

<http://nazuna.com/tom/>

---

<山崎農業研究所情報>

---

◇第 119 回定例研究会要旨——地域社会の動きと高校農業教育（その 1）

2005 年 12 月 3 日（土） 太陽コンサルタンツ会議室 30 名参加

〔講演要旨〕

2. 農業高校の担う役割について思う

——菅谷 明氏 [千葉県立茂原農業高校教諭]

勤務した学校からの体験、そこから感じたことを報告する。千葉県立下総高校 15 年間、千葉県立茂原高校 8 年間勤めてきた。前者では農業機械科は工業科の授業に属していた。また後者では農業特別専攻科、農業機械科での教育で、農業科での体験の不足で苦労した。

下総高校では生産技術科（農業）、航空車両整備科（工業）、情報ビジネス科（商業）がある。農業関係では自営者養成に力を入れている。農業系は全寮制（1 年間）であった。現在はその制度は崩れて期間は 10 ヶ月間となり、これも不評で 6 ヶ月間になった。現在は農業関係外の遠隔地の生徒も入っている。生産技術科（農業）では農業、園芸、畜産がある。寮には教師も当番で泊まる。部屋割りも昔は 8 人であった。いまは 2 人となっている。寮生活の当番宿直では生徒との話しが出来たのはよい。ここから寮生活自身にも改善すべき問題が分かった。従来の寮制度のよい面は十分には発揮されず、かえって教育への弊害も感じた。

茂原高校では、農業特別専攻科に属した。ここでは通常の農業関係学科以外に農業特別専攻科がある。この専攻は高校卒業生対象の 2 年制である。農家の子弟であることが主な条件で、入学は学校の裁量に任せられ、かなり自由である。全国に 9 校ある。1 週間に月火水の 3 日間は学内授業、残りは家庭学習である。この専攻 1 年生は全国先進農家への 3 ヶ月の宿泊研修をする。この期間に皆は大きく成長する。希望者は海外研修でニュージーランド農家にも行く。2 年生は農業研修として北海道士幌町に行く（7 日間）。営農計画、卒業論文を課している。

以上の体験からいまの教育では教科よりも生徒指導に重点を置く。現在の偏差値での入学割り振りの弊害がある。教科指導では基礎基本が重視され、望む

専門分野の教育がおろそかになる懸念がある。学校農業クラブも重要な課外活動であるが、指導の先生の発表の場となっている場合もあり、一部生徒のなかには、疑問に思っている者もいる。農業高校の先輩はいまの県内農業を築いてきた。その先輩たちは「もう農業高校ではない」との声がある。この現状を克服していくのが課題である。

(文責：安富六郎・小泉浩郎)

---

<老兵の戯言> 鶏卵の話

---

先日、それとなく観ていたTV番組で、いま話題の「細木数子」氏が「鶏卵」の話をしていて、筆者の「かつて」の専門であった分野なので、興味深く拝聴していたところ、耳を疑う話が聞こえた。それは、鶏が1日に、卵を「2〜3個」産むと云う「話題」であった。

これまでも、これに似た偽事象は、マスコミ報道で、いくらでも「目」にし、「耳」にしたことがあったので、それほど重要視しなかった。加えて、現職を退き、第二の人生に「没頭」している筆者には、それほど「重大事」でもなかった。

ところが、数日後の新聞紙上で、この問題に「日本養鶏協会」がクレームをつけた。それについて、TV局側と細木氏の事務所から、「謝罪」のコメントが公表された。

ここで問題は、TVと新聞である。新聞記事のすべてに目をとおすひとはほとんどいない。とりわけ若い人達は、高機能携帯電話で、興味あるニュースだけを目にしていて、上記の問題も、TV報道は、広く日本中に広まったと思われるが、新聞紙上での両者の意見を観た人は、TV視聴者に比べたら、天地雲泥の差であろう。

これでは、日本中の多くの人々は、鶏が1日に、卵を2〜3個産む、と云うことを信じるだろう。その為に、鶏卵が「価格の優等生」だと云われては、鶏が可哀想である。真実は何処に。マスコミを恨みたくもなる。

そう云えば、数年前、あの「O-157」問題で、「カイワレ大根」が、スケー

プゴートにされたのを思い出す。今、世界中で問題となっている「BSE」や「鳥インフルエンザ」にしても、真実は「あそこ」にあるのに、とってしまふ。消費者の猛省を促したい。

藤原 昇

山崎農業研究所会員・中国・浙江大学・客座教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<編集後記> この年を忘れてなるものか

---

忘年会シーズンである。が、知人からのメールのなかで「年を忘れようとは思いません」という一言があった。彼の言わんとすることは、そんなにあっさり物事を忘れてしまっていていいんですか？ ということのようにであった。

たしかに今年も、かんたんに忘れてはならないたくさんのが起こった。個人的には先の総選挙のさいのドタバタ劇が悪い意味でたいへん印象にのこっている。

山崎農業研究所の今年最後の定例研究会で話された西川裕人先生（元千葉県立流山高校教諭。内容は次号で紹介予定）は、怒ること・問題意識をもつことのたいせつさを力説しておられた。

忘れてばかりでは、怒ることもできまい。

2005年12月28日

山崎農業研究所会員・田口 均

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

-----  
次回 175 号の締め切りは1月10日、発行は1月12日の予定です。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第174号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2005.12.29（木）発行 山崎農業研究所&編集同人



mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp

\*\*\*\*\*ここまで『電子耕』\*\*\*\*\*